地球温暖化の猛威がついにやってきた

佐々木　勝裕（ささき　かつひろ／岩手県一関市在住）

この夏、盛岡では真夏日が 42 日連続して最多記録を更新し、私の住む一関でもかなり雨が降った 1 日を省けば、やはり 43 日続いたことになる。さらに 8 月の熱帯夜が 16 夜、2001 年から 22 年までの総計が 14 夜なので著しい急増だ。このような記録ずくめのことが北日本や東日本などでも容易に見られるようになり、世界では猛烈な熱波に、干ばつ、山火事、豪雨、ハリケーンなどが続く。

変わる農家の季節感

現住所に J ターンして 25 年、毎年水稲「ひとめぼれ」を育てているが、バインダーによる稲刈りはいつも 9 月の中下旬と決まっている。しかし、今年は稲の成熟が非常に早く、早い年に比べても半月ほど早い。8 月下旬には稲刈りの適期となったが、30 数℃を超える気温での農作業は熱中症の危険が伴うため躊躇、結局 9 月 3 日から始めた。

近くに住むブルーベリー農家の知人によると収穫の開始が年々早まっているが、今年は昨年よりも 10 日ほど、収穫終了は 20 日ほど早く、収穫期間が短くなり収穫量も減っているとのこと。

農作業の初めや終わりが半月もずれると長年身に染みついた百姓暮らしの季節感が頼りにならず、温暖化の激化に伴いそのリセットを強いられている。

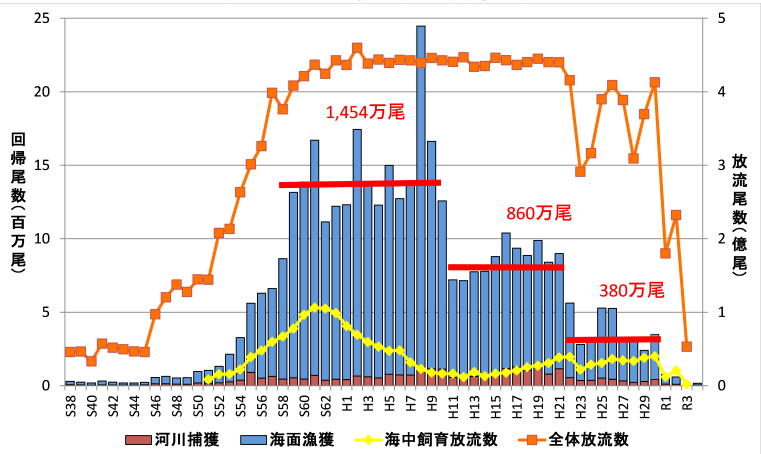
極めて異常な三陸沖の海水温

岩手県ではサンマのほかに秋サケもほとんど獲れなくなり、イクラや荒巻サケを店頭で見ることが無くなってきた。県水産技術センターによると秋サケの回帰尾数は段階的に減り、令和になって最盛期の 3％程度まで急減している（下図参照）。その原因は放流直後の三陸沿岸での稚魚生息数減少によるもので、近年の 4 月以降の海水温の上昇による生息適水温 5 ～ 13℃の日数が急減していることと関連付けられている。

そのことが気になり、春ごろから日本近海の海面水温データを時折閲覧すると三陸沖での平年差が +2 ～ 3℃のピンク色ではなく真っ赤っ赤、5℃以上も高い日が続いていた。気象庁が同海域で 7 月下旬に調査した結果が 8 月 9 日に発表されたが、タイトルは「三陸沖の海洋内部の水温が記録的に高くなっています」だ。黒潮続流の北上により表面では 4℃程度、深さ 300 m では 10℃も高くなっているとし、更に踏み込んで「水産資源の分布などに関連する海洋環境への影響が懸念されます」と結んでいる。サンマや秋サケに限らず、一層深刻な事態になりそうに思えてしまう。

大気中の CO_2 濃度の増加が止まらず、海水温の上昇も続き、「地球沸騰化」や「気候崩壊」の危機が語られている。数年後に今を振り返ると、2023 年から地球温暖化の猛威がより顕著になったと語られそうだ。

秋サケの回帰尾数と放流尾数



岩手県水産技術センター提供、
一ノ関地球温暖化対策地域協議会発行「広報 eco 第 34 号」から転載